オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

マキ

オプション教材マキ　読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

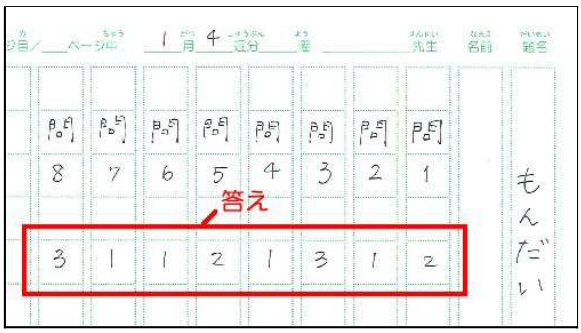
読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

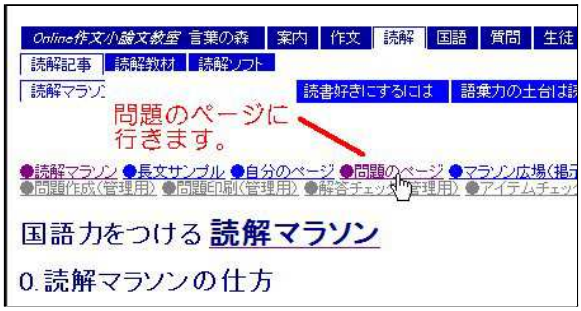
読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

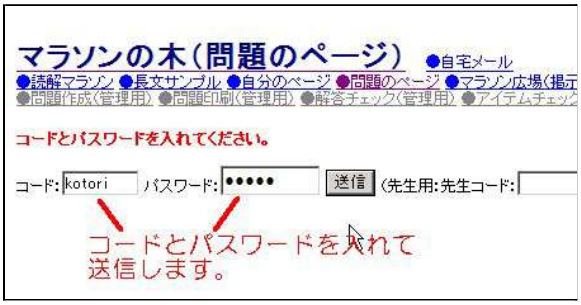


▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

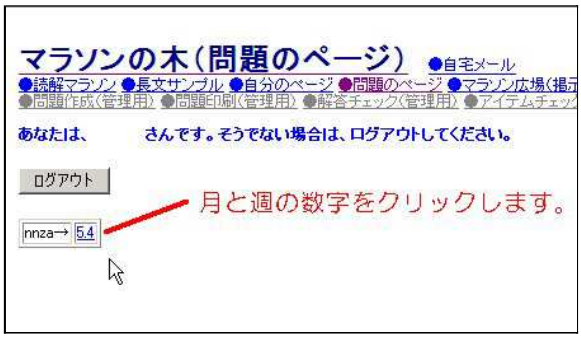
1.



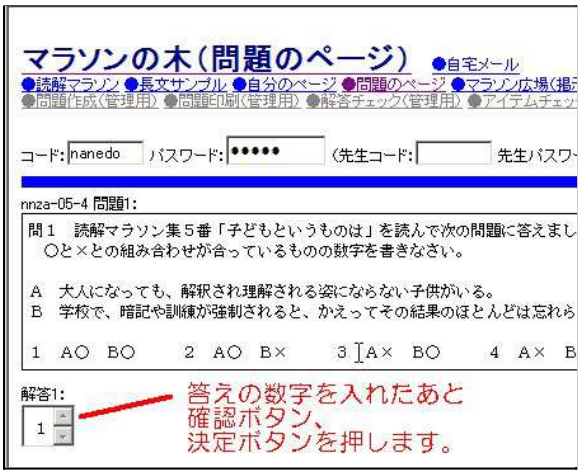
2.



3.



4.



5.

玄関のドアが内側と外側とどっちに向いて開くか、そういうことを多くの日本人は意識しない。

しかし、事実は、この向きが日本とイギリスとでは反対になっているのである。日本の玄関ドアは外に向かって開く。これはほとんどどの家でも例外がない。しかるに、イギリスの家屋では玄関のドアは決まって内側に向かって開くのである。

これがどっち向きに開くかということは、じっさい客人を迎え入れる上では極めて重要な意味を持っている。というのは、こういうことである。

まず日本式に外に向かって戸が開く場合、客が戸のまん前に立っていたら、ドアにぶつかってしまって、まともに開くことができないだろう。だから、客は、一歩退いて戸の開くのを待つか、または少し横に避けて待機しなければならない。しかも、主人の側ではドアを向こう側に押しやるわけだから、それは心理的な方向としては「向こうへ放つ」という傾向があって、「迎え入れる」という形にはなりにくい。そしてもし、主人がドアのノブを丁寧に握ったまま向こう側に向けて戸を開くとすれば、客が入ってこようとするその動線上に、彼の進入を妨げるようなあんばいに立ちはだかることになるわけである。これは言ってみれば、主人、客人ともに、ドアの「内側」でぶつかってしまうかっこうになる。こうして、日本の家は、その玄関ドアの脇で客を迎えるのにはまことに都合の悪いシステムにできている。（中略）

さて、こういう事実の裏には、むろん、そうでなければならない文化的背景または歴史的理由があるにちがいない。ただ漫然とそう決まったわけではあるまい。

まず第一に、日本では家の内外は「露地」と「床の上」という区別があった。だれでも靴や下駄を脱いで家に「上がる」のである。その接点が「玄関」なのである。そこは内外の交錯するところ、すなわち空間的には屋根の中（＝内）であって、しかも、機能的には土間（＝外）なのだ。客は、玄関まで入っただけではいまだその家に「上がった」ことにはならない。むしろ心理的には玄関先で「追い返した」ことになるであろう。靴を脱いで、かまちから床上に上がったとき、初めて客人として迎え入れられたことになる。

したがって、客を迎えるときにもっとも正式のスタイルでは、主人は床の上に正座して、いわゆる三つ指ついて頭を下げるという形になる。ドアを開けて人をその内側に入れるだけでは、それは客を迎え入れる儀礼としていまだ経過点に過ぎず、正式に迎え入れる儀式が完了したとはみなされない。

しかし、イギリスで客を迎えるというのは、まさにこの「ドアを通過した時」をもって完了したとみなされるのであって、そこには「床の上下」というような垂直方向の高低差は存在せず、もっぱら、ドアの「うちそと」という水平方向の境界があるに過ぎない。（中略）

基本的には、玄関のドアの開く方向のちがいには、こういう文化的な意識の相違が内在していると私は考える。（中略）

もう一つの大きな理由は、「雨じまい」にある。日本はイギリスとちがって、きわめて「水っぽい」国である。雨の降り方はむしろ熱帯的で、パラパラとしか雨が落ちてこないイギリスなどとは大きなちがいである。しかも、春は菜種梅雨、夏に梅雨、夕立、秋には台風、冬に時雨、……と一年中雨が家々をせめたてる。どうやって家に雨が入らぬようにするか、ということは日本の家屋にとって重大な問題にほかならなかった。（中略）

ところが、イギリスの家屋では雨じまいなどはあまり重要には考えられていない。せんだってもふた月ほど住んでいたロンドンの住宅では、ちょっと強く雨が降ると、ほとんどジャブジャブという感じで窓から雨が流れ込んできて、まことに閉口したものだった。

この感覚からすると、ドアが内側に向かって開くことなども全然問題にならない。しかし、日本人のように家に雨を入れないという見地からみれば、ドアが内側に開くのはこれまた充分に不都合なのであったろう。なぜといって、ドアの外枠と戸の関係上、ドアに降りかかった雨滴がどこへ落ちていくか、ということを考えてみればよい。内開きの場合、それはどうしても、内側すなわち玄関の中が水浸しになることを意味するからである。

（林望「リンボウ先生イギリスへ帰る」）

バスは混んでいた。
二十年も前の話だから、乗り物の数も少なく、おまけに乗る人間も冬は厚着であった。家の中も街も今よりずっと寒く、人は暗い色の冬支度に着ぶくれて、殺気立って朝晩のラッシュに揺られていた。
その朝も、私は吊革にもブラ下がれず、車の真ん中で左右から人に押されながら、週刊誌を読んでいた。
押しあいへしあいの中で、二つ折りにした週刊誌のページをめくろうとすると、
「あ」
という声がする。
声の主は、黒い学童服を着た小学校低学年らしい男の子で、私の胸のところに押しつけられている。その子は、ちょっと口をあき、訴えるような目で私を見た。週刊誌の向こう側には、漫画が載っていた。彼は、漫画を読み終わらないうちにページをめくられたのだった。
私は漫画を少年に見せるようにしてまたしばらく揺られていた。少年の目が漫画の吹き出しのセリフの部分をゆっくりと追い、声を出して読んでいる。おしまいまで読み終えたところで、少年は目をあげてまた私を見た。
バスが少し空いてきて、少年は次の停留所で降りる気配があった。ところが定期券を忘れたらしい。ポケットを探って困っている。
私が、
「忘れたの？」
とたずねると、怒ったような顔をしてうなずいた。私は小銭入れからバス代を出し（十円か十五円であったかおぼえていない）少年の手に握らせた。少年は、小銭を握ったまましばらく外を向いて揺られていたが、降りぎわに胸のポケットから赤鉛筆を抜いて黙って私に突き出した。ボール紙をむくと芯の出てくる、当時としては珍しいもので、父親か誰かに貰ったのであろう、十センチほどの使いかけであった。

（向田邦子『あ』）

台所から出てきた母が、「なにをぼんやりしとるのけ。」ときいた。
私が「雀」とこたえると、私に近づいてきて、箱の中をのぞいた。
「おとっつぁんがいま怒っとったのは、この雀のことかや。」
「うん。」
「どれ、かわいい子だね、どこにおったや。」
そして母は、白い手で、もはや眠っているらしい子雀をにぎった。
いつも、父といっしょになって「殺生」を許さない母が、いつになくやさしく、この子雀に愛情を示してくれたので、私は、自分のことのように嬉しく感じるとともに、多少奇異な気持ちにとらわれて、母の顔をまじまじと見あげねばおれなかった。
母はまだ若く美しかった。しかし、三月ほど前、母のたったひとりの子ども、そして私には異母弟にあたる宇吉が、むしを起こしてぽっくり死んでしまってから、愛の中心を失って、生気のないその日その日をおくっていた。顔なども、青白くやつれていた。
「柱時計のうしろに、ぎす籠があったな。」と言いながら、母は家の中にはいった。私は、しめた、と思って母を追い越し、すぐ柱時計のうしろから、ほこりにまみれたバッタの籠をとり出してきた。母は、その中に綿を敷いて、その上に子雀をおいた。子雀はやわらかいまっ白な綿にくるまって、いまは暖かそうに眼を閉じた。母と私は、頬がすりあうほど顔を近づけあって、のぞいていた。愛されることの少なく、そして愛されることをひと一倍欲していた私は、子雀が母に愛されるのを、自分が愛されるのと同様に感じて、心はかぎりなくおびただしいよろこびに酔いしれていた。
まもなく、「殺生」を犯している母と私を発見した父は、母とひともんちゃく起こさねばおかなかった。
「そんなものは、子どものおもちゃじゃないか。」と父はにがにがしげに言った。
「子どものおもちゃでもええ。」と母はだだをこねるように言った。

そしていつまでも、籠の中を澄んだひとみでのぞいていた。私の眼には母が少女のように見え、父が鬼のように映った。父と母のせりあいの結果が、かわいい子雀の運命、ひいては私の生活の希望を左右するのであったから、私は小さい心の中に、ひそかに両手を合わせて、母の言い分が通るように、父の我が折れるように、といのっていた。私の願いはききとどけられたのか、母の我が通って、やがて、「そんなものはあ、今夜のうちに死んでしまわあ。」と父は負け惜しみを言いながら、その場を去っていった。私たちは、安堵した。
父が去ってしまうと、父の負け惜しみに言いすてていった言葉が、いまは一羽の小さな生物によって結び合った私と母の心に、なにか暗い不安の影を投じた。子雀は、少なくとも午後中、一滴の水もひとつぶの米も、口にしていなかったのである。ほんとうに父の言葉のとおり、今夜のうちに冷たくならないとは、だれが保証できよう。そこで母は、遅い夕飯がすんだ後、おひつの底に残った米つぶを杯に入れて籠の中にさし入れてやったり、私は雀にはみみずがよいようだから、藪でみみずを捕ろうといって、自らちょうちんを持ち、私がおぼつかない手もとに、満身の力をこめて打ちこむ鍬の先を、照らしたりした。そんな母がけんめいになり、私もまた、かつてしらない希望と幸福に夢中になって、われを忘れて奔走したのに、やわらかい米つぶをさしつけても、うまそうなみみずを鼻の先に持っていっても、子雀はそれをたべようとはせず、籠をゆすられるたびに、うすい透明なまぶたをぱっとあけたが、すこし羽をごそごそさせると、再び居心地よさそうにまぶたを閉じ、重い眠りにおちてしまうのであった。私の眼ももう眠い時間であった。私は床にはいって眼を閉じる前に、もう一度、父と母がつぎの間で、子雀について言い争っているのを耳にした。

（新美南吉『すずめ』）

読解マラソン集 ４番 妹が隆に、あんなのほしかったなあ……と ma3

妹が隆に、あんなのほしかったなあ……と、小さな声で言ったのは、夏も終わりのころのことであった。隣の屋根でのんびり寝そべっている野良猫を見てのことばである。「母さんの猫嫌いは知ってんだろ」。「ううん、違うの。お祭りのときお店で見かけた招き猫なの」。「どの店だよ？　」。「七味とうがらしの出店」。「……そりゃ、今さら無理だよ」。「だからもういいの」。これだから困るのである。隆は招き猫探しにでかけることにした。

招き猫を飾ってある店は見かけても、売っている店はたいそう少なかった。土産物店で見つけても、いやに小さくて貧相なのである。やっぱり秋祭りまで待つしかないか・・・・・と、隆は思った。しかし、珍しく妹がほしがったことを考えると、隆は何とか早いとこ見つけて持ち帰り、妹を驚かせてやりたかった。自分も気に入り、妹も一目で気にいるやつを早いとこ見つけたかった。

それが、ないのである。招き猫にも、実にいろんな人相（？）のものがあることに、隆は初めて気がついた。大きさ、姿、表情、色……と四拍子そろって、一目ぼれできる招き猫となると、売り物どころか、見かけるのだってむずかしいことに、隆はやっと気がついた。

思いあぐねて明のやつに相談することにした。話を聞いた明は、隆の顔をまじまじと見つめた。「招き猫だなんてお前、どういう趣味なんだ。おれの親友だとは思えん。ほしがるにこと欠いて、そんなおじんくさいもの、目をつけやがるなんて」。「すまん、じつはほしがっているのは妹なんだ」。そう打ち明けると、明の態度はがらりと変わった。

妹の趣味まで何か言われそうだとかまえていた隆は肩すかしをくらった感じだった。同時にもう一つの何かも感じていた。「いっしょに探してやるよ」。明のやつは急に親切になった。

（今江祥智『今日も猫日和』）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ざーっ。裏手の大えのきが風に鳴って……ぱら、ぱら、ぱらっ。落葉が時雨のようにふりこぼれる。

まっさおな空。沼の向こうに富士も見えて、まさに絶好のもみ干し日和だ。

和夫は、今日から五日の農繁休暇。もちろん、父母の仕事を手伝うのはいやではなかったが、しかし彼の胸の中には、妙に溶けない一かたまりがあった。それは、五日間、くたくたに働きつかれて登校すると、その五日間を遊びくらした同級生が、新刊の雑誌などを小脇に、いそいそやってくることだ。

今年の初夏、田植期の農繁休に、雨にぬれて苗を運ぶつらさから、ふとその不公平を口にすると、母のかねは苦笑して、「生まれどころがまずかったね。せめて、三井家でないまでも、裏の本田さんへでも生まれてくればよかったのに」といった。

本田さんは、もと、地主。農地解放で田畑はへったが、十町歩ばかりの山林がものをいって、けっこう、昔の生活をつづけている。母はそのことから、高校へ進学したがる和夫に、冗談半分に言ったのだ。

だが、和夫としては、それは見当はずれな母の言葉だった。和夫は、こういいかえしたかった。

「おれは、おれだけよければ、それでいいなんて思ってないよ。おれは、百姓の子だけ、農繁休だといって、くたくたになるまで働いているのを、大人たちが、あたりまえみたいに見ているのをおかしいと思うんだ。」

けれども、和夫はそれを口に出してはいわなかった。いえば、生意気だと、父母はもちろん、兄や姉にも、笑われるか、しかられるかするに決まっているからだ。

ところで、母に手伝って、筵を広げていく和夫を、じっと見ていた父の仙吉は、

「和夫よかったな」

そしてからから笑った。

しかし、和夫には、何が「よかった」のかわからなかった。

すると、母がいった。

「そうだ、今年は洪水にもとられず、風にもやられず、こんなにどっさり米がとれて、おかげで和夫は、農繁休の甲斐があってヨ。」

「ちえっ！」

和夫は苦笑で舌打ち。

兄と姉はげらげら笑った。

だが、父たちが稲刈りに出かけてしまうと、母は、内密のようにいった。

「和夫。来年も、今年みたいに豊作だったらお父は、和夫を、高等学校へやってくれるそうだよ。」

「ほんとか？」

和夫は、目をみはった。それは、まんざら予期しないことではなかったが、しかし、今日、母の口から聞くのは意外だった。

実は昨日、農繁休暇についての注意のあとで、担任の平野先生が、高校進学希望者を調べた時、和夫は、一たん肩のあたりまで挙げた手を、ひょいとおろしてしまったのだ。それにひきかえ、並んでいる白石昇は、確信に満ちて手を挙げた。それは和夫にとって、まるで夢のような一場面だった。というのは、戦後、外地から引き揚げてきて、荒れた常陸野の一角に開墾の鍬をおろし、やっと雨露をしのぐ掘っ立て小屋に、ランプでくらしている開拓農家。昇の家もその開拓農家の一軒だったからである。

和夫だけではない。昇が手を挙げた瞬間、二年二組の四十六人は、あっ、といっせいに呼吸をのんだ。みんな、出し抜かれたような気がしたのだ。

（住井すゑ『生きて行く』）

最初のうちこそ荒涼と見えた樹木も景色も、いつか季節の移り変わりのパノラマの中で清澄な美しさとして私の目に映るようになり、私はもの心ついた時からずっとかかえこんできた空想癖をのびのびとふところに包み入れてくれる大きな手にようやくめぐり会えたのです。

登下校の道は言葉ではとても言いつくすことのできないすばらしい私の書斎であり、宝庫であり親しい友と歩く時は応接間ともなるのでした。その道は冬の朝、きしみをあげる薄氷の下に秋の名残の燃えたつような紅葉の落葉を緋の絨毯ともまごうばかりに敷きつめているのです。雨のあがった夏の早朝、動こうにもそれができないほどびっしりと霧がたちこめ、それなのに私の肩や顔のそばでは白い水蒸気が幽玄のもののごとくに音もなく流れていくのです。

松のこずえを渡る風の音を聞きたさに、いく度ひとりで林のある小高い丘に登ったでしょう。手賀沼の葦の間から立ちのぼる陽炎の香気にむせびたくて、いく度朽ちかけた船着き場へ足を運んだでしょう。

これらの思いは、胸の内だけにかかえこむにはあまりに清冽で豊麗で大きすぎ、何かの手段をもってこれを外にほとばしらせないことには、自分がどうかなってしまいそうでした。

そうして私は生まれてはじめて自分の意志で日記を書きはじめることとなったのです。それは、もう一人の自分に語りかけることでした。もう一人の自分は、私が何を語りかけても、容姿が劣っていることを理由に突き放したりしないし、私の感動を、あざ笑ったり茶化したりも決してしません。それどころか不思議なことに、思いがけない問いを返したり疑問への答えの糸口さえあたえてくれる、実につきあいがいのある相棒ですらあるのです。

与謝野晶子の『みだれ髪』を、まだ中学生が読むには早いと母に反対された時も、彼女だけは認めてくれましたし、大好きだったリルケの『マルテの手記』がどう読んでも理解できなくて苦しんでいた頃も彼女はいっしょになって頭をひねってくれました。

（池田理代子『私の少女時代』）

公団住宅では、犬や猫を飼うことが禁じられていた。それでも幼い子供たちはどこからか、よれよれに毛のよごれたむく犬や生まれたばかりの猫の子を拾ってきて、夕方まで飽くこともなく遊んだのち、きまったように「今晩だけでいいから寝かせてやって。」と切ない顔をしてねだった。手ごろなボール紙の箱に古綿などを敷いて、ベランダの隅に子供が置いてやったか弱い生き物を、子供たちの寝入ったのちにそっと捨てにゆくのは、むごくて罪深い感じがした。

翌日の朝、目を覚ますやいなや飛び起きていって、目に涙を浮かべて立ちつくしている子供に、「ゆうべお母さん猫が迎えに来て喜んで帰っていったのだから、もうそっとしておいてやりなさい。」と言い聞かせながら、親の心も楽しくはなかった。

いろいろ考えたすえ、文鳥を買ってきて飼うことになった。本当はもっと大きくて感情の動きの分かるインコのようなものがほしかったが、貧しい私には手が出なかった。まだよく毛も生えそろわないで、あちこち赤肌のむき出しになっている小鳥の雛の姿は、あまりかわいいものではない。餌をほしがって意外に太い声でのどを鳴らしながら、くちばしを精いっぱい開いた顔は、貪欲で妖怪じみた感じさえした。

だが、子供たちは、腹がすくとしりに火がついたように鳴きたて、腹がいっぱいになるとうつらうつら夢ばかり見ているような小さな生き物に、時には気まぐれな、時にはこまやかで頼もしい保育本能を示すようになった。それにこたえるように、ひと月、ふた月とたつにつれて、二羽の白文鳥の雛は毛なみが整い、半年ほどたつとくちばしや目のふちに桜貝のようなやさしい紅の色をにじませ、羽はつやつやと内側から輝くような美しさを見せるようになった。かごの入り口を開けると、すぐてのひらに乗ってきて、腕から肩によじ登り、耳たぶを突っついたり、髪の毛を引っぱったり、親愛のかぎりの動作を、いたずらっぽくやさしく、いつまでも繰り返すのであった。

このかれんなやさしさは男の子には少しもの足りないだろうな、と思って見ていた。

私は山の中の一軒家で育ったけれども、もの心ついたときからいつもそばに犬がいた。犬好きの父は、多いときには十二匹もの紀州犬を飼っていた。私が学校を終えて村はずれの橋のところまで来ると、きまってそこに、父に命じられて私を迎えに来た犬が待っていて、そこから二キロの山道を後になり先になりして歩いて帰るのだった。家に帰りつくと、父は私と犬とを交互にいたわり、おやつをくれた。

古代とあまり変りのないような自然の中で、家に飼う生き物と、自然に耐える厳しさを分かち合って生きた幼時の体験を持つ私には、子供たちが小さな小鳥とかわし合うちまちまとした愛情は、見ていていらだたしく、もの悲しくなるような気がした。それでも何も飼わないよりはよいと思った。

それから二年ほどたった年の夏、私たち一家は蓼科へ三、四日の小旅行をすることになった。二羽の文鳥は小さな鳥かごに移されて、兄弟が交替で持った。ふろしきにすっぽりと包んで運ばれるかごの中に、文鳥はひっそりとおとなしかった。後から考えると、真夏の東京の暑さから冷房した列車へ、さらに長い間バスに揺られて蓼科山ろくの自然の涼しさの中へと、一日のうちにめまぐるしく温度の変ったことがこたえたのにちがいない。部屋に入って、覆いの布をとってやっても、ぐったりとして元気がなかった。私たちは環境の変ったせいだろうと軽く考えていた。

翌日の早朝、白樺の林で鳴くジュウイチやカッコウの声に目を覚まされて、真っ先に起き出した子供たちが鳥かごの異変を見つけた。まだ薄暗い部屋の隅で、文鳥は二つの白い綿くずのようになってこと切れていた。小さい命の失われ方のあまりのあっけなさに、ぼうぜんとなるばかりだった。

（岡野弘彦『文鳥と月見草』）

働きはじめた記念に、腕時計を買ってくれたのは、兄であった。それに寿命がきて、自分のふところから次の時計を購った。そのころ流行らなかったアラビア数字の文字盤のを選んだのは、父の古い懐中時計に対するあこがれが、心の底に残っていたからだろうと思う。安価なものだったが、寿命は長かった。いまのは四代目になるが、例の液晶時計である。毎日ネジを巻いてもやらないのに、健気にも正確に動いている。何だか、自分自身、そして、この世に在る働き好きの男や女に似ているようで、つらくなる。

働いて働いて、その行くさきが、働く同士のしあわせならいうことはないが、その逆になるのだったら、これは困る。

そんな、時計の針を逆まわりさせるようなことに、私の時間を使いたくないし、使われたくない。

村の駅にあったあの振子時計は、戦場に送られるたくさんの若者と、白木の箱になって帰ってきたたくさんの若者をしっかりと見ていた。その時計は、いまははずされて、電気時計にかわっている。けれども、そのあたらしい元気ものの駅の時計に、古い振子時計が見たものと同じものを見せたくない。

私たちの時計、目に触れるあらゆるまちの時計に、かつて犯した人間にそむく歴史の時間をふたたびきざませていいものか。

時計は何故、時をきざむか。

私たちは、何故に時間を恵まれるのか。つまり私たちは、何故こうして生きて、暮らしているのだろうか。よくはわからないけれどもただひとつ言えることは、人の命を奪ったり奪われたりする戦争なんかのためではない、ということである。私たちが、これからどう生きるか、それを時は見守っている、と思う。私たちのあらゆる時計に、あやまった歴史をきざませてはなるまい。

（増田れい子『インク壺』）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

（母親に死なれた「私」は、近くの魚屋によく遊びに行っていた。ある時、魚屋の青年にコジッケという鳥を捕りに行こうと誘われた。行ってみると、そこにはコジュケイという鳥の親鳥とひながいた。青年はさっそくコジュケイを捕りにかかった。）

彼（魚屋の青年）は親鳥を追いまわしているさいちゅうである。ところがどうしたことだろう。その親鳥はけがをしているらしく、つばさをバタバタとあおぎながら地面をのたうっている。

それも、手をのばせばつかまりそうなところをあやうくはばたきながら、坂道へ坂道へと逃げてゆく。

そのあわれな姿にひきかえ、ゴム長ぐつをブカブカ鳴らしながら、へっぴり腰で追いすがってゆく青年の姿はこっけいだった。私は『ジャックと豆の木』にでてくる大男が、雲の上を逃げるジャックを追いかけてゆくあの姿を思いうかべた。

が、やがて一人と一羽が坂道のまぎわまできたとき、思いがけないことが起こった。

バサバサバサッ。はげしい羽音がしたかと思うと、ひん死の鳥が勢いよく地面から飛びたったのである。

そして、あっけにとられている若者の頭上をちょんぎって、それきり小ぐらい屋敷のしげみに消えてしまった。

それは鳥が敵をひなから遠ざけるためによく使う「疑傷」という手段だった。童話のとおり、ジャックはつばさという、「おの」で、みごとに大男との世界をたち切ってしまったのである。

魚屋はキツネにつままれたようにあんぐりと口をあけて立ちすくんでいる。

が、しばらくするとくるりとこちらにむきなおり、もう気がぬけたように、私のことも、石の下のひなのこともほったらかしてさっさと帰ってしまった。

私は胸をなでおろした。

だがそれは、小さなものに対する人間らしい思いやりなどというものとも、すこしちがっていた。

私はただ、鳥の母子が自分たちの手でちりぢりにされてしまうのを見ていられなかったのだ。

私の母の命をうばっていったものが、どんな世界のどんな力だったのか私にはわからない。だが、すくなくとも自分がその運命の手のようなものになってほかの生命をおびやかしたり、家庭をこわしたりすることだけはできなかった。

これは、カエルのおなかをパンクさせてよろこんでいたあの子どもにとって、思いがけない発見だった。

ともかくコジュケイの家族は無事に悪魔の手からのがれることができた。

彼らはふたたびなにごともなかったように自分たちの巣へぞろぞろ帰っていったにちがいない。そう、なにごともなく――これは家庭にとってたいせつなことだ。

だが、すでになにごとかが起こってしまったときはどうだろう。もしあんちゃんがまんまと母鳥をつかまえていたなら、このつぎからひなたちはどうやって身をまもるのだろう。

茶の間でぼんやりと祖母の帰りを待ちながら私は考えた。答えはひとつしかなかった。

それは保護色にたよって石のまねをすることでも、巣にうずくまったきり外へでないことでもない。「一日も早くひなでなくなってつばさを持つ」ことであった。

（舟崎克彦『雨の動物園』）

児童図書館員という職業につき、本を読む子どもたちとつきあうようになって、かれこれ十年たつ。本を選ぶこと、本を楽しむこと、本から実質的な益を得ることにかけては、立派な読書家といえる子どもが多いのだが、この小さい読者たちは、ときに思わぬ言動を見せて、わたしたちを驚かす。

たとえば、「この本はとてもいい本だけど、ぼくは○○ページだけは、絶対に読まないからね」と宣言する子。（問題のページでは、主人公の愛犬が死ぬのである。）あるいは、二巻に書かれた本の下を借りてゆき、「この本、下と書いてあるのに、とてもむつかしかった」と不満げに返しにくる子。わたしの著した本をもってとんできて、「ねえ、ねえ、これ先生が書いたの？」ときく子がある。そうだと答えると、かの女は、目をまんまるくして驚嘆する。「きれいな字ねえ！」

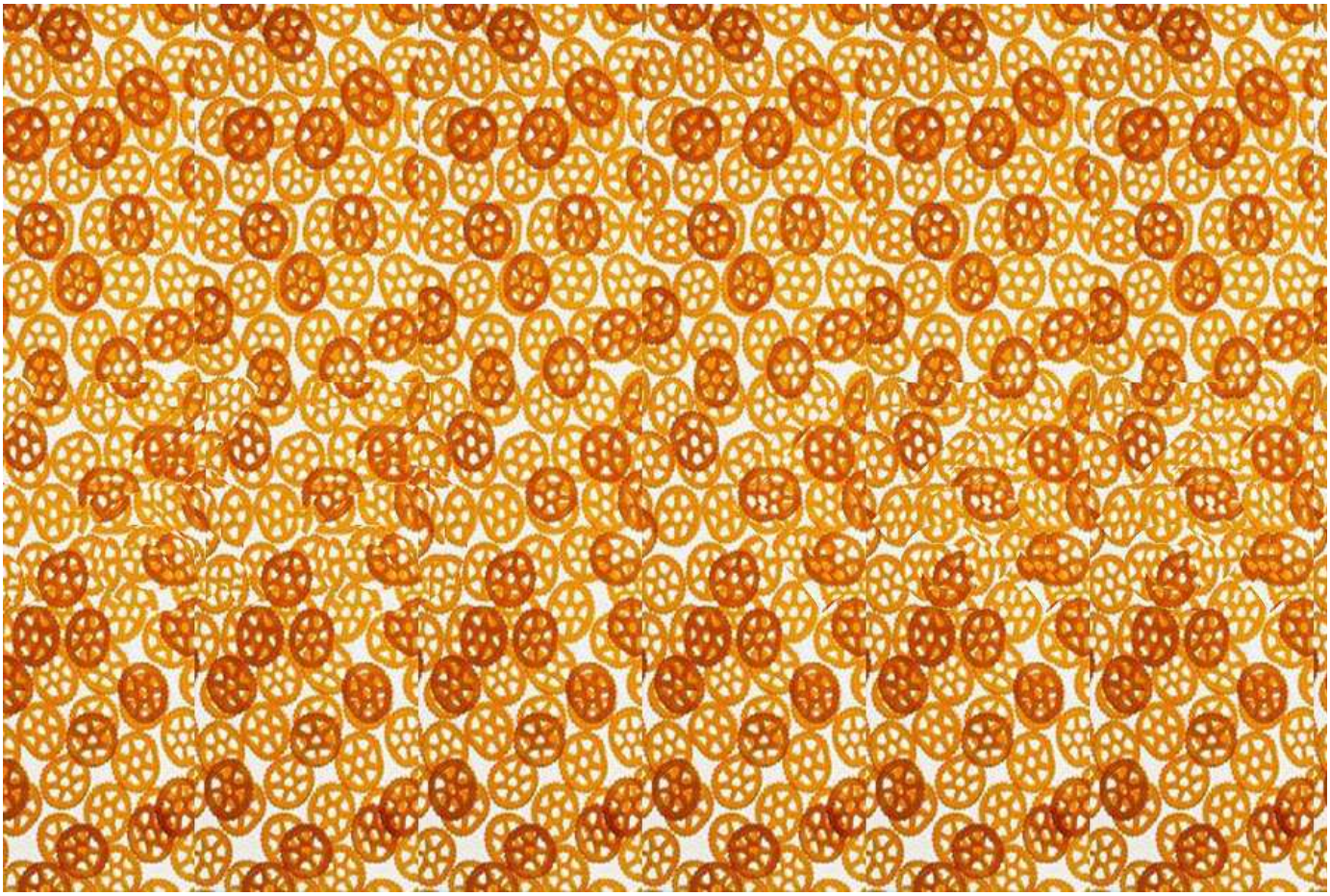
しかし、小さな読者のことばは、いつもわたしたちをほほえませるとは限らない。ときとして、思いがけぬ考えの深みに、わたしたちを誘うことがある。「東京にアスランの喜ぶもの、何かあるかなあ……」と言った。『ナルニア国ものがたり』を読んだある子がいっ

『ナルニア国ものがたり』は、『悪魔の手紙』などの神学的著作で知られるイギリスの文学者C・S・ルイスが、子どものために書いた全七巻からなる壮大なファンタジーで、アスランというのは、その中に登場するキリストを象徴するライオンである。

「……東京タワーじゃ喜ばないねえ。でも、アスランは、ほんとうにいいものは残るっていったんでしょ……」

（松岡亨子『小さい読者』）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



　ほんとうの友達は、多くの場合、若いときからの年来の友人、学校時代あるいは二十歳前後のいわゆる青春時代からの友人です。大人になってから、ことに三十歳を過ぎてから、心からの親友を見いだすことは、ないことはないでしょうが、なかなか困難なことです。志賀直哉氏と武者小路氏にしても学生時代からの友人でしたし、わたしの場合でも、親友の大部分は学生時代からの友人です。だから学生時代に、あるいは二十歳前後の若いときによい友人を発見することはきわめて大事なことですが、なぜ若いときの友人が一生の友人になることが多く、それに比べて大人になってからでは親友はできにくいか、このことを考えてみると友情とは何かがはっきりしてくると思います。

　その人の存在だけでこちらが慰められ励まされるような友達、生涯続いて変らない美しい友情、こういったものが若いときにつくられることが多いということは、そういう時代には各自がすなおに人生に直面しており、したがってすなおな自己をさらけだして生きているので、心と心がすなおに触れ合うことが多いからでしょう。言いかえれば、青春の時代にあっては、打算的功利的な考えで人と交際することが、大人の社会に比べて少ないからでしょう。

　一口に友人といっても、その種類や程度はさまざまだとまえに申しましたが、世間には単に利害関係だけで結ばれている友人関係や、利害関係だけでなくてもごく表面的な関係だけで交際している人を友人と呼んでいる場合がたいへん多いのです。利害関係だけで結ばれているならば、その利害関係の変化によって、今まで親友のように交際していた人どうしがたちまちかたきのようになってしまうこともあるでしょう。それはけっして友達とは言えません。また単に表面的なこと、たとえばクラスが同じだとか、趣味が似ているとか、職場が一つだとかいうことで友人になっている場合があっても、それはそれでよいでしょうが、これだけでは生涯の友にはなれません。なぜなら、ほんとうの友情とは心と心の触れ合いですから、表面的なことだけでは成立せず、互いの真実をぶつけ合うすなおな気持ちが必要だからです。

　大人になってからは親友ができにくく、若いときにこそ真の友情を見つけることができるのは、自己の真実を裸のままで示すすなおな気持ちを若い人は持っているのに、大人になるといろいろなからができてしまって、自己を開き示すことが少なくなるからでしょう。友情の成立に必要なのは、必ずしも若さということではなくて、人生にたいする真実な気持ちを聞き示し、また他人のそのような気持ちを受け入れる心のすなおさです。言いかえれば、人生に対する真実な気持ち、自分自身に対する誠実さ、これなくしては友情は得られず、逆にまた、これさえあれば若くても若くなくても真の友情をうることができるに違いありません。友情における相互の信頼というものは、人生に立ち向かうこの真実さを相互に認め合うことですから、性格や意見がどのように違っても、外的な環境や身分がどのように違っても、そういった相違をこえて成立するものですし、これは相互の生き方の最も深いところでの信頼ですから、生涯変ることなく続くのです。

　こういう信頼は、当然、相手に対する尊敬を伴います。人生に対する真実真剣な態度ほど尊敬すべきものはないのですから、信頼が尊敬を生むのは当然です。信頼をもって人に接すれば、わたしたちはそこに自分の持っていないさまざまな長所を発見し、それを尊敬し、そこから学び、それによって励まされます。逆にまた、そのような信頼を友人から寄せられるならば、それにまさる大きな慰めと励ましはないでしょう。なぜなら人生への真実という点での信頼は心の最も深いところでの信頼であり、他の何ものによっても動かされることのないものだからです。人がなんと言おうとも、世間がどんなに自分を誤解しようとも、友人だけはわかってくれていると思うことができるのは、なんというありがたいことでしょうか。

（矢内原伊作『友情について』）

読解マラソン集 １２番 近頃、いろいろな分野で ma3

近頃、いろいろな分野で「二世」が目立つ。スポーツ界をはじめ、芸能界や政界にまで、二世の活躍する場は及んでいる。人間のさまざまな能力について、「遺伝」と「環境」のどちらが影響を与えるのかというテーマは、古くから議論されてきたものである。二世の活躍などを見ると、人間の容姿や才能、性格などを決めるのに、やはり遺伝のほうが育った環境より重要と言っていいのだろうか。

いや、必ずしもそうとはいえない。ここでは、生まれてすぐに人間の手を離れて育った「野生児」の例を取り上げてみよう。一九二〇年にインドの森で見つかり、カマラ（八歳半）とアマラ（一歳半）と後に名付けられた二人の少女は、オオカミに育てられた子供として知られている。発見当時、二人ともオオカミの住んでいる穴から出てきて、オオカミと同じように行動した。

もしくは、四足歩行をおこない、舌を垂らしたままで何度もくり返し吠えるのである。また、光を怖がる一方で、夜は活動的になり、毎日四時間ほどしか眠らなかった。飲み物はペチャペチャなめ、食べ物は肉食に偏っていて、うずくまった姿勢で食べた。行動ばかりか、体の形にまで野生生活の影響が現れていた。手のひらや肘、膝、足の裏の皮膚が、厚く硬いかたまりになっていたのである。

二人は見つかってから孤児院で育てられたが、二足歩行するまでに六年もかかるなど、ゆっくりとしか個性は現れなかった。

この野生児の例をみると、容姿には遺伝が深く関わっているが、行動や性格の発達に関しては、生後まもなくからの、子供の置かれた環境がきわめて重要なことがわかる。

（大石正道『遺伝子組み換えとクローン』）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

読解問題 4月4週分

問１　読解マラソン集１番「玄関のドアが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　日本の玄関のドアは、横に開くが、イギリスの玄関のドアは内側に開く。
Ｂ　日本の玄関のドアが外側に開くようになったのは、そうでなければならない理由があったからである。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集１番「玄関のドアが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　日本では、玄関は、機能的に「外」に属している。
Ｂ　イギリスでも、雨のよく降る地域では、外側に開くドアになっている。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集２番「バスは混んでいた」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　少年が、セリフの部分を声を出して読んでいたのは、まだ低学年だったからである。
Ｂ　少年が、「あ」と言ったのは、漫画を最後まで読みたかったからである。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集２番「バスは混んでいた」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　少年が小銭を握ったまましばらく外を向いて揺られていたのは、自分の降りる停留所を探していたためである。

Ｂ　少年が小銭を握ったまましばらく外を向いて揺られていたのは、バス代をもらってうれしかったからである。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集３番「台所から出てきた母が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、それまで母にあまり甘えたことがなかった。
Ｂ　母は、小すずめを育てることが得意だった。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集３番「台所から出てきた母が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　子すずめは、二人の介抱によって、少しずつ元気を回復していった。
Ｂ　父は、子すずめを助けることに反対だった。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集４番「妹が隆に、あんなのほしかったなあ……と」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　妹は、普段から、ほしいものがあると兄に頼んでいた。
Ｂ　母は、招き猫があまり好きでなかった。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集４番「妹が隆に、あんなのほしかったなあ……と」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　明は、招き猫をおじんくさい趣味だと思っていた。
Ｂ　明は、隆の妹のために探すとなると、急に熱心になった。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

読解問題 5月4週分

問１　読解マラソン集５番「ざーっ。裏手の大えのきが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　和夫は、農繁休で、自分だけが働くのを不公平だと思っていた
Ｂ　和夫は、百姓の子だけが働くのを大人があたりまえと見ているのがおかしいと言った
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集５番「ざーっ。裏手の大えのきが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　和夫は、豊作だったら高校に進学できるかもしれないとうすうす期待していた
Ｂ　和夫は、貧しい農家の昇が進学できるのだから、自分もできるはずだと思った
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集６番「最初のうちこそ荒涼と見えた」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、もの心ついたときから、自然の中で空想するのが好きだった
Ｂ　登下校の道は、夏の早朝の雨の日に、白い霧がよくたちこめた
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集６番「最初のうちこそ荒涼と見えた」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、友達がいなかったので、日記を書き始めた
Ｂ　「乱れ髪」を読むのを認めてくれたのは、もう一人の自分である
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集７番「公団住宅では、犬や猫を」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　子供たちはよく猫の子を拾ってきたが、大抵は翌朝お母さん猫が迎えにきてつれていった
Ｂ　文鳥の雛は、最初はあまりかわいくなかった
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集７番「公団住宅では、犬や猫を」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、子供たちが生き物を飼うのはよいことだと思っていた
Ｂ　二羽の文鳥は、旅行につれていった次の日に、もう死んでしまった
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集８番「働きはじめた記念に」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、二つ目の時計を自分のお金で買った
Ｂ　時計の針を逆回りにさせることとは、歴史を後戻りするようなことである
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集８番「働きはじめた記念に」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　古い振子時計は、戦争に行く若者と、戦争から死んで帰ってきた若者を見ていた
Ｂ　古い振子時計は、先生の歴史をきざんだので、今ははずされている
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

読解問題 6月4週分

問１　読解マラソン集９番「母親に死なれた『私』は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　親鳥はけがをしているので、もう少しでつかまりそうだった
Ｂ　コジュケイのひなは、親鳥が逃げている間、石の下にいた
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集９番「母親に死なれた『私』は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、カエルのおなかをパンクさせてよろこんだことがある
Ｂ　私は、そのコジュケイのひなたちが、早くつばさを持つようにと願った
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集１０番「児童図書館員という職業につき」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　「下巻」の「下」を、「下級生」の「下」のように勘違いする子もいる
Ｂ　わたしのじょうずに書いた字のきれいさに驚く子もいる
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集１０番「児童図書館員という職業につき」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　小さな読者のことばは、わたしたちをいつもほほえませてくれる
Ｂ　東京タワーは、いいものだから残るはずだ
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集１１番「ほんとうの友達は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　年をとってくると打算的になることが多くなるので、心からの親友は見つけにくくなる
Ｂ　利害関係だけで結ばれた友人関係は、利害がなくなると友人関係もなくなる
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集１１番「ほんとうの友達は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　友情の成立には、若さというものが必要だ
Ｂ　相手に、自分の持っていない長所を発見することが友情の目的だ
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集１２番「近頃、いろいろな分野で」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　カマラとアマラは、行動だけでなく、体の形も変わっていた
Ｂ　「二世」の活躍が目立つのは、遺伝が環境よりも重要だからである
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集１２番「近頃、いろいろな分野で」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　カマラとアマラは、少しずつ人間の行動に近づいていた
Ｂ　形には遺伝の影響が大きいが、行動には環境の影響が大きい
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

４ ～ ６ 月

小１ コード：nane パス：	小２ コード：nane パス：	小３ コード：nane パス：
小４ コード：nane パス：	小５ コード：nane パス：	小６ コード：nane パス：
中１ コード：nane パス：	中２ コード：nane パス：	中３ コード：nane パス：
高１ コード：nane パス：	高２ コード：nane パス：	高３ コード：nane パス：

１ ～ ３ 月

小１ コード：nane パス： PDF	小２ コード：nane パス： PDF	小３ コード：nane パス： PDF
小４ コード：nane パス： PDF	小５ コード：nane パス： PDF	小６ コード：nane パス： PDF
中１ コード：nane パス	中２ コード：nane パス	中３ コード：nane パス

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
高１ コード：nane パス： PDF	高２ コード：nane パス： PDF	高３ コード：nane パス： PDF